

特集 〈緑蔭図書紹介〉

他者との関係が、

ことばを生み、「私」をつくる

浜田寿美男『「私」とは何か』（講談社選書メチエ）

村松 賢一

ことばの対話性

ことばとコミュニケーションに関心をもつ者として、「ことばの力が人々の生活世界を成形するうえでどのような働きをなすのか」を正面から論じた本書は、ああ、もっと早く出会っていればと

思わせる内容に満ち満ちています。私が、ことばとコミュニケーションに意識的に向き合うようになったのはアナウンサーという職業に就いてからですから、もう四〇年になります。その間、暗中模索、試行錯誤を繰り返してようやく「こういうことではないのか」とつかみかけた見方が、本書

を開くと、さらに徹底的に考え抜かれていたので、一口で言うとは、それは、「ことばそのものもつ第一次的、本質的な対話性」ということになるでしょう。「このことは、人間のことばというものを考えるうえで非常に基本的なことだと思っただが、言語学や国語学の間では案外これが見落とされてきた」。私がいま関わっている国語教育の世界でも、この点は長いこと見過ごされてきました。ことばの力というものを、それぞれの個人の中に育まれる閉じた力と見て、他者との関係の中で育つ開かれた力ととらえる観点が不足していたように思うのです。たとえば、「ことばの力」という場合、「筋道を立て、きちんと話す」という自己完結的なとらえ方になりやすく、「他者との関係性の中で自分の思いを表現する」という関係的な視点をなかなかとれないのです。ですから、「誤解をさせて、訂正していく話」がすぐれ

た話だ（佐伯胖）とは考えにくく、ついで、「誤解をさせない」話がすぐれた話だと思いがちです。それぞれが、「はっきりまとまった考えを言い合おうのが話し合いだ」という転倒した見方に支配され、「はっきりしないから話し合って考えをまとめろのだ」という見方に立てないのです。これは、これからの「話す・聞く」教育の行く末を左右する重要な観点だと思えます。

ことばの本質的対話性

ここまで、つまり、ことばの対話性ということろまでは、私もたどり着いていたのですが、本書で目を開かされたのは、その前にある「第一次的、本質的」ということばです。これは、そもそも私たちがことばを獲得する過程からして、という意味だったのです。

私は、人は、ことばを獲得してからはじめて他

者との対話が可能になるのだと思っていました
が、ちがう、他者との関係が先にあって、そこか
らことばが生まれてくるのだ、と著者は言うので
す。たとえば、幼児が母親といっしょに犬を見
て、ワンワンということばを覚える場面を考えて
みましょう。犬とワンワンが子どもの中で結
びつくまでの過程を心理学的にたどってみると、
まず、「ワンワン可愛いね」という母親の声が
子どもに聞き取られるためには、子どもも、雑然
とした音の渦の中から、母親の声を取り出さなく
てはならない。これで、ワンワンというへこと
ばが共有されたことになりませんが、それが犬を
意味するのだとわかるためには、今度は、子ども
が、母親の眼差しや指さしの助けを得て、犬を風
景から立ち上げることが必要です。こうして犬と
いうへ対象が共有されたとき、はじめてへワン
ワン＝犬という記号的関係が子どもの中に成立

するのです。「つ
まり、へ意味する
もの」とへ意味さ
れるもの」とが結
びつくうえで、ま
ずその土台になる



のが、「自分―相手」の縦の軸である」というこ
とになります。これは言語習得期に限られたこと
ではありません。およそ、人がことばを介して他
者と理解を成り立たせるためには、こうした関係
性の成立が前提となるということなのです。

私の拙い説明では、わかったようなわからない
ような気持になられたかと思いますが、著者は、
母親の見ている犬を一緒に見るといふ、あたりま
えと思っていることができないとどうなるかを、
豊富な臨床例を引いて、「声を共有する」、「一緒
に見る」といふ関係的行為がことばの習得にとつ

でもつ抜き差しならない意味を実にわかりやすく丁寧に解き明かしてくれます。

身体の個別性と共同性

本書で、もう一つのキーワードになっているのが「身体」です。人間は、皮膚で他と隔てられていて、その意味では個別的な存在です。個別的というのはつきつめれば、他人のことはわからないということになります。それでいながら、その身体は、〈女―男〉の關係に象徴されるように、「それ自体で完結しない」という意味で共同的だといえます。著者はこの共同性を、赤ちゃんの微笑み返しから、あくびが他人にうつる例までさまざまエピソードをまじえて説明し、身体そのものから最初から備わった本源的なものを見ます。つまり、人間とは、個別的にして共同的这个自己矛盾を生きるしかない存在なのです。

コミュニケーションというものを考えるとき、このような認識はとても重要です。私たちは完全に通じ合うことができないからこそ、少しでも理解しようとはばを尽くすことが大切なのです。

わかり合っていると高をくくってことばを惜しむと必ずしつべ返しがきます。でも悲観的になる必要もないのです。なにしろ、私たちは、私はあなたによつて私になり、あなたは私によつてあなたになるという相補的な關係の中で大きく重なり合つて存在しているのですから。

人はこうした相互依存と、ことばによる協働を通じて、他者との關係を幾重にも織りなしながら自己を創っていくのです。

（前お茶の水女子大学教授、現スピーチ
コミュニケーション教育研究所主宰）